

古典落語 『芝浜』

- ◆ 三遊亭園朝の三題噺が原作といわれる。
- ◆ 「酔っ払い、財布、芝浜」の題で即興で作られた三題噺ベースとなったとの説。
- ◆ 古典落語の中でも屈指の「人情噺」

【あらすじ】

棒手振り（ぼてふり）という天秤棒で荷を担ぎ町を売り歩く魚屋の魚勝は、酒におぼれ、商売を怠けてばかりいる。

「ねえ、おまえさん、おまえさんっ」

ある朝早く、女房に叩き起こされ、嫌々ながら芝の魚河岸に向かう。

魚河岸についてみれば、まだ一刻早過ぎ、まだ開いていない。誰も居ない芝の美しい浜辺で夜明けを待っていると、偶然に財布を見つける。開けると中には50両の大金が。魚勝は自宅に飛び帰り、仲間を呼んで浮かれ気分で飲めや歌えの大騒ぎ。挙句に酔いつぶれて寝てしまう。

目を覚ますと、女房はこんなに呑んで酒代をどうするのかとおかんむり。魚勝は拾った財布のことを躍起になって訴えるが、女房は、

「情けないねえ、この人ァ・・・いくら貧乏してるからって、おまえさんそんなものを拾った夢エみたのかい？」

焦った魚勝は家中を引っ繰り返して財布を探すが、どこにも無い。愕然として、ついに財布の件を夢と諦める。それ以来、魚屋は酒を断ち、心を入れ替えて商売に精を出す。

懸命に働いた末、三年目の大晦日には小さな店を持って借金ひとつない暮らしになった。魚勝は女房に対してその献身をねぎらい、頭を下げる。

ここで、女房は例の財布を見せ、告白をはじめめる。

あの日、魚勝から拾った大金を見せられた女房は困惑した。横領すれば窃盗罪にあたる。長屋の大家と相談した結果、大家は財布を拾得物として届け、女房は夫の大酔に乗じて「財布なぞ最初から拾ってない」と言い切る事にした。時が経ってもついに落とし主が現れなかったため、奉行所から拾い主に財布の大金が下げ渡された。

この真相を知った魚勝は、女房の背信を責めることはなく、道を踏外しそうになった自分を助け、立直らせてくれたその機転に強く感謝する。

女房は懸命に頑張ってきた夫の労をねぎらい、久し振りに酒でも、と勧める。はじめは拒んだ魚勝だったが、やがておずおずと杯を手にする。

しかし思い立った魚勝、次には杯を置く。「よそう。また夢になるといけねえ。」

参考文献：

麻生芳伸『落語百選 冬』（ちくま文庫、1999年）

京須借充『古典落語CDの名盤』（光文社新書、2005年）

Wikipedia「芝浜」の項